



ちょっとこぼれ話 XLVII

濱口 恵子

人間は、一体、誰が創ったのでしょうか？
どこから来たのでしょうか？

科学的な話はさておき、神話や伝説の世界では、様々です。

旧約聖書の創世記では、神が、第1日目に天と地を創造した後、昼と夜を創りました。2日目に大空を創り、水を分け、3日目に、水を集めて海を創り、乾いた所を地と名付け、地に種を生じる草、実を結ぶ果樹などの植物を創りました。4日目、天空に光る物を2つ創り、大きい方の光る物に昼を照らさせ、小さい光に夜を照らさせました。太陽と月の誕生です。大空に星もちりばめました。5日目、水に水の生き物を、大空に翼を持つあらゆる鳥を創りました。6日目に、地に野の獣など、地を這う全ての物を創った後、最後に、全ての生き物を支配するべく、神自身の形に似せて人間の男女を創りました。かくして、天と地の全て、万象を完成させた後、7日目を祝福して聖なる日とし、創造が休みとなりました。

では、ギリシア神話においては、どうでしょうか？

諸説あるところですが、ヘーシオドスの「仕事と日」の記述を少しご紹介しましょう。

ヘーシオドスによると、5世代の人間がいました。

最初に、クロノスが天空、つまりオリュンポスを支配していた時代に、オリュンポスの神々は、黄金の種族を創りました。この種族は、憂いや労苦、嘆きを知らず、あらゆる善き物に恵

まれて、神々と変わることのない、幸せな生活を送り、死ぬ時は、眠るかのように死んでいきました。大地が彼らを隠した後は、ゼウスにより、地上の善き精霊となり、人間の守護神となりました。

次に、神々は、黄金の種族より少し劣る、銀の種族を創ります。この種族は、黄金の種族とは似ても似つかず、神々を崇めることもせず、祭壇に犠牲も捧げなかったので、クロノスに代わって天空の支配権を取った、クロノスの子ゼウスが、彼らを消してしまいます。

ゼウスは、第3の種族である青銅の種族を創ります。銀の種族よりさらに劣った、とねりこの樹から生じた種族で、恐ろしく力が強く、暴力的な上、心は鋼のように頑なで非情でした。武器も農具も家も青銅製で、彼らは、お互いに討ち合って倒れ、滅びてしまいます。

次に、ゼウスは、豊饒な大地の上に、前よりは正しく、立派な第4の種族を創ります。これは、今の人間より一つ前の世代で、半神と言われる英雄達の、高貴なる種族です。しかし、彼らは、テーバイやトロイアなどの数多の戦で、多くは果ててしまいます。ただ、一部の者だけが、父なるゼウスの計らいにより、人の世から離れた地の涯で、住まいと命の糧を与えられ、憂いなく幸福に暮らしているとのことでした。

最後の第5の世代が、鉄の種族で、我々と同じ人間です。この種族は、昼夜を問わず、労役と苦悩に苛まれ、死すべき運命を定められています。そして、神々を恐れず、親と子、兄弟、友とも心通わず、親が年を取れば冷遇するようになります。誓いを守る者や正義の士を尊ぶ気

風は廃れ、暴力や悪事を働く者が重んじられるようになって、ゼウスにやがて滅ぼされるだろうと、ヘーシオドスは嘆いています。

このように、ゼウスが人間を創ったという伝承がある一方、古代ローマ時代のギリシアの著作家アポロドーロスの“ギリシア神話 Bibliotheca ビブリオテーケー、もしくは Bibliotheca”によると、プロメーテウスが、泥と水から人間を創ったということです。そのためか、プロメーテウスは、もともと人間に好意的でした。

プロメーテウスは、ヘーシオドスの「神統記」では、ウーラノスとガイアの子供でティーターン一族であるイーアペトスと、同じくティーターン一族である大洋神オーケアノスとテテュースを両親に持つクリュメネーとの子供です。アトラス、メノイティオス、エピメーテウスの4人兄弟です。アポロドーロスによれば、母親はアシアとされています。アシア Asia は、アジア大陸の語源です。

アトラスについては、シリーズ3回目で、天空を背負っていること、大西洋 Atlantic Ocean の語源であること、地図帳や図譜を指すアトラスも、このアトラスからきていることなどをお話ししました。

ある時、ゼウスと他のオリュンポスの神々にどのように犠牲を捧げ、人間と分配すべきか、神々と人間が争いになった折、判者の役を買って出たのがプロメーテウスでした。彼は、犠牲の獣を分けるに当たり、一計を案じます。一つには骨を脂で包み、もう一つには肉と内臓を牛皮で包み、ゼウスに差し出して、先に選ばせたのです。ゼウスがまんまと騙され、前者を選んだので、人間が一番いい部分を得る結果となりました。大いなる神ゼウスが、怒り心頭に発したこと、この事件を恨みに思っていたことは想像に難くありません。ゼウスは、腹いせに、人間から火を取り上げてしまいます。

火を取り上げられて寒さに震え、自然の猛威に怯える人間を見て、プロメーテウスは憐みを

覚えます。彼は、鍛冶の神ヘーパイストスの鍛冶場からこっそり火を盗み、^{おおういきょう}大茴香という草の茎の中に隠して持ち出し、人間に与えました。しかし、それは、すぐさまゼウスの知るところとなり、ゼウスからより一層の怒りを買う羽目になりました。

他にも、プロメーテウスは、人間に多くの恩恵を与えました。家を建てることや気候を観測すること、数の数え方、船の作り方、文字等、様々な技術や知恵を受けました。

常々、自分の知恵を自慢し、ゼウスにも負けないと豪語していたプロメーテウスに対し、とうとう堪忍袋の緒が切れたゼウスは、プロメーテウスを荒野の涯、スキュティアのカフカソス山の峰にある大きな岩に磔にするよう、ヘーパイストスに命じます。ヘーパイストスは、自身の鍛冶場で作った釘で、プロメーテウスを岩に打ち付けて、決して解けない鎖で縛ります。そして、ゼウスは、毎日毎日、エキドナとテューポーンの子供である大鷲に、彼の肝臓を啄ませたのです。人間であればそのまま死ぬところですが、悲しいかな、プロメーテウスは神であるため、不死です。夜ともなれば、食いちぎられた肝臓が再生し、腹部が塞がり、元の体に戻ります。夜が明けると、また、大鷲が彼の肝臓を貪るという具合です。不死ゆえの永遠の責め苦は、何千年もの間、絶えることなく続き、プロメーテウスを苦しめ続けました。

プロメーテウスを、かくも悲惨な責め苦から救ったのが、ゼウスの息子である英雄ヘーラクレスでした。これについては、シリーズ10回目で、少しご紹介しています。ヘーラクレスは、自分に課せられた12の難業の1つである、世界の西の涯、ヘスペリデスの苑にある黄金の林檎を取りに行く途中で、プロメーテウスを見つけます。ヘーラクレスは、プロメーテウスを苦しめている大鷲を弓矢で射抜き、縛めを解いてあげました。プロメーテウスは、幾千年とも3万年とも言われていた地獄の苦しみから、やっと、解放されたのでした。